求める知と求められる知

ー社会人大学院生へのインタビューを通してー

西田　晃一

要　旨

大学院における教育と研究について，「知の実践」という観点から検討を行った．ここでは，社会人大学院生とその指導教員へのインタビューを通して，社会人大学院生たちが共有する知識観をたどった．彼・彼女らに共通しているのは，知識が自らの外側に存在するものであり大学院はそれを提供してくれる場であるということ，彼・彼女らの求める知識が実践的で現場の問題に解答を与えるような知識である，という点である．彼らのニーズに応える教育は，ただ知識を提供するだけでは事足りず，彼・彼女らを研究活動，つまり知識を生産する活動に引き込むことによってのみ成立する．そうした意味でも大学院は，知識を提供する場ではなく，知識を生産する場として自らを再定義すべきだというのが，本研究の結論である．

Knowledge - Studying or Learning?

Koichi NISHIDA

Abstract

The purpose of this study is to consider the relationship between education and research in a graduate school.

Six interviews were held in two groups. Each group had three members, two were graduate students and one was their supervisor, and they were interviewed separately. All graduate students in this research have also full time jobs.

They regard graduate school education as an occasion to learn practical knowledge and they are hopeful of finding a solution to problems they have faced in their job experiences.

The only way to educate them is making themselves engaged in research, not learning. That's why graduate schools in Japan must now redefine itself as research institutions.

Ⅰ．はじめに

本研究は，二組（６人）の方々へのインタビューをもとに構成されている．彼・彼女らが語るのは，大学院という「教育・研究[1]」機関に対する「思い」である．一方は「教員[2]」という立場から，他方は「大学院生」という立場から．彼・彼女らの「語り」を通しておこなわれる試みは，表層的には現在の大学院教育への問題提起になるかも知れない．

しかし，深層において目指すのは，「知識」とは何か，「教育」とは何かを問うことである．我々は，学校教育を通して様々な「知識」を伝達されてきた．しかし残念なことに我々は，その大半を「忘れ」てしまっている．大学院は，学校教育においては「最高峰」に位置する教育・研究機関である．そこで行われている「営み」は，知識の「伝達」と「生産」とに単純化できる．そしてそれは，実は初等教育から累々と繰り返されていることの典型に過ぎない．ならば大学院での「営み」を省みることで，「知識」と「教育」について，なにがしか得られるものがあるのではないだろうか．

もちろん，その試みは，ほんの小さなステップに過ぎない．

また，ここでの議論は，必ずしも一般化に適さない．なぜならば，非常に限られた数のインタビューにもとづく議論だからである．しかしながら，この少数者の語りのなかには，一般化に通暁する考えが存在するはずである．そのことを意識しつつ，彼・彼女らの「語り」のカテゴリー化に努めた．もとより，分析者自身の個人的経験にもとづくバイヤスは避けようがない．その意味でも，議論の一般化には慎重でなければならない．

Ⅱ．方法

１．目的

本研究の目的は，教員と院生，それぞれが大学院に求める「知の実践」を比較検討することにある．教員が求める「知の実践」と院生が求める「知の実践」は，一致しているのだろうか．それとも乖離しているのだろうか．拙い個人的な経験では，教員の求める「知の実践」と院生の期待する「知の実践」とは必ずしも一致しているとはいいがたい．完全に一致している必要はないのかも知れないが，その期待する方向性が正反対を向いているとしたら，やはり問題であろう．この点をインタビューを通して明らかにしたい．何が違っているのか．それは何に起因しているのか[3]．

そのために，インタビューでは，「進学動機・経緯」「授業・演習」「研究・論文執筆」といったトピックスを中心に質問を行った（質問骨子はAppendix参照）．

２．インフォーマント

本研究でインタビューを行った大学院生は「社会人大学院生」と呼ばれる（以後本研究では，院生インフォーマントと呼ぶ）．彼・彼女らは，それぞれ「社会人」として職業を持ちつつ大学

院に通っている．その意味で彼・彼女らは，part-time studentと位置づけることが出来る(4)．

part-time studentに的を絞ったのは，職業人の再教育が，今後の大学院に求められている社会的要請のひとつと言われているからである．彼・彼女らは，いわばその先駆けである．その彼・彼女らの「教育」や「研究」に対する考え，彼・彼女らを指導する教員（以後本研究では，教員インフォーマントと呼ぶ）の「教育」や「研究」への考えは，今後の大学院を考える上で様々な示唆を与えてくれるだろう．

６名のインフォーマントの概略を表１に示す．

表１　インフォーマントの記号と基本属性

記号	区分	年齢	職業	専門／指導教員
AT	教員	40歳代		
AS1	院生	30歳代	システムエンジニア	AT
AS2	院生	30歳代	公務員	AT
BT	教員	30歳代		
BS1	院生	40歳代	教育職員	BT
BS2	院生	40歳代	教育職員	BT

３．手続き

3.1　インタビューの時期

平成12年の７月～８月にインタビューを行った．

3.2　インタビューの方法

インタビューは，個人面談方式で行った．

面談は，約20m²の個室で実施した．面談の際には，インタビュアーとインフォーマントだけが在室し，二人は直角に位置するよう着席した．

会話はビデオテープに記録した．ただし，インフォーマントの同意が得られない場合はMDに音声のみ記録した．

所要時間は，40分から１時間程度で，これはインフォーマントとの会話に依存する．ただし，１時間を超えないように配慮した．

インタビューは，３名のインタビュアーによって実施された．

インタビューの際に行った質問の骨子をAppendix AとAppendix Bに示す．実際のインタビューではこの順序で質問が行われたとは限らない．また，表現もその時々によって変わっている．しかしながらインタビュアーは，この質問骨子を常に参照しながら，ここに含まれる質問事項をもれなく尋ねるよう努めた．

Ⅲ．分析および議論

本研究では，以下の手続きで分析および議論を進めた．

まず始めに，議論のための視座を提示した．

次に，この視座に関連する発言箇所を，インタビューから引用した．引用には通し番号（引用1，2，3，…）とインフォーマントごとの番号（AS1.1，AS1.2，…）とを付した．なお，インフォーマントごとの番号は，引用の末尾に表記した．また，必要な場合には質問者の発言を（Q.）という形で，補足説明を（注：）という形で引用の中に加えた．

最後にこれらを総括する議論を行った．この議論の中でも，必要に応じて発言を引用した．

1．視座1：なぜ「学ぶ」のか？

ここでは，なぜ大学院で「学ぶ」のかという，動機づけの側面に焦点をあてる．

大学院を「教育」と「研究」の機関であると呼ぶとき，それは教員側からの視点である．大学院生の側から見たときそこは，「学び」と「研究」の場といえるだろう．なぜ，大学院で「学ぼう」と考えたのか．何を期待して大学院への進学を決意したのか．

引用1　進学の動機を尋ねられて

確かに，決心というよりも，これは，あのー，うーん，どう言えばいいだろう，自分自身の，その，一つの可能性を作ってるっていう部分なんですね，逆に言うと．プラス……，皆さんが普通で考えるのは，今の状態にこう，いろいろとこう，くっつけていくような能力なり，それが結局，可能性を作っていることにもなるんだはと思うんですけども，まあ，この社会じょ，状況ですから，あのー，いつなんどき，会社にやめさせられても大丈夫なようにっていう，そういう一つの可能性というのは，オプションですよね．を，考えてますよ．（略）そうですね．自分が行ける道（注：現在の職業以外の生きる道）をやっぱり作っておかないことには，ちょっと今後，難しい時代だなということは，もう，つくづく感じてますんでね．まあ，そこが一番のここに入ってきた理由でもあるわけですけどもね．

（AS1.1）

引用2　大学院進学を決意する「きっかけ」を尋ねられて

自分なりに，時代がこうなっていくからこれがいるかなと．それ，そういうまあ意識はあったんで，それに合ってたということと，あとは，まあやっぱり，このままではやっぱり会社は危ないんじゃないかと．自分を見捨てるんじゃないかと．あのー，そもそも，自分が出身の学部は，その会社にとってはメインの，えー，事業内容のメインの部分とは，やっぱり合致しない部分なんで．いずれは，まあそういう時が来るんじゃないかと，自分自身の，あっ，その頃は，自分自身のリスク管理だってことは言ってましたけどもね．

（AS1.2）

引用3　修士課程修了後の予定を尋ねられて

そうですね，修士課程修了して，それを，まあ実世界……実社会に生かしていきたい……いけるような形でという，考えてますけどね．

（AS2.1）

引用4　大学院進学の理由を尋ねられて

うん，あのー，まあ，そのー，今の行政の方も○○（注：インフォーマントが所属する研究科が対象

とする分野）の波には逆らえないなという，危機感は自分なりにあったんで，うん，ということで，で，まあ，そういう形で，（中略）やはり先の話，聞きたかったんで．

(AS2. 2)

引用５　大学院に進学しようと思った主な理由を尋ねられて
長い間，ちょっとやっぱり，（中略），現場でずっとやってまして，で，やっぱり，もう少し自分の何ていうかな，レベルを高めたいというか，もう少し自分を深めたいっていうか，ずっと現場にいますと，どうしても，こう，マンネリになってしまいますんで，やっぱり，もう少しいろんな勉強をしたいということで，特に，○○（注：インフォーマントが所属する研究科が対象とする分野）関係に興味持ってましたんで，そういう部分で，まあ，大学か大学院か，大学院，最初あんまり考えてなかったんですけども，（中略）大学院受けれますよということなんで，まあ大学院受けたんですけども．

(BS1. 1)

引用６　大学院進学の経緯を尋ねられて
まあマスター（注：修士の学位）取得が目的だったんですけども，△△，▲▲（注：いずれも教育のある領域をさす）をずっとやってきたし，これからもやっていきたいので，▲▲，△△をやれるところというのが，まだすごく少ないんですね．で，（中略）BT先生に師事させていただくために，こちらへまいりました．
（Q．マスターに来ることが目的ということをおっしゃっていたんですけれども，それは，職業上必要とか，あるいは，研究上……）
そうですね，はい．やっぱり高学位はあった方がいいですね．それもありますし，まあ勉強したいということもあったので．

(BS2. 1)

院生インフォーマントらが大学院への進学を思い立ったそのときから，彼らにとってそこで何かを「学ぶ」ということは，いわば自明のことであった．引用１－６がこの点を示している．端的に言えばそれは，不足していると感じ，欠けていると感じている知識を補うためである．「可能性を作る」，「危機感」，「レベルを高める」，「自分を深める」，「マスター取得」といった発言が共通して示すのは，知識を獲得することで自らのスキルアップを図ろうという意図である．

結果としてそれは，キャリアアップに繋がるのであろう．ただし，現在の我が国で，学位の取得が直ちにキャリアアップに結びつくケースは，まだ少ないものと考えられる．

引用７
…期待していないというのが，もう本音ですね．（中略）どう評価するかはいろいろあると思うんですよ．まぁそれが，いいふうに出るか，悪いふうに出るか．そこですよね．いいふうに出れば，それはそれでいいでしょうし，悪いふうに出れば，もう，それはそれで，また逆に私はここでそういう可能性を作っているわけですから，その先をゆけばいいわけですから．

(AS1. 3)

引用８
まあ，極端な話，その，会社休んで大学院というのは，会社はどういう形でその人を見ているかというのがね，疑問ですわね．こいつ，勝手なことをやっとると，そういうふうに見ているかも知れないし．

(AS2. 3)

引用9
（Q．仕事に，こちらで学んだことが役立つ？）
それはちょっとわからないです．

（BS2. 2）

これらの引用が示すのは，院生インフォーマント自身が，学位の取得とキャリアアップとをひとまずは区別して考えているということである．その意味で彼らは，「自己啓発」に強く動機づけられて進学してきたと言えるだろう．

ここで特徴的なことは，彼・彼女らの語りの中に「研究」あるいはそれに類する言葉が出てこなかったことである．もし同じインタビューを学部卒業後直ちに進学した大学院生に行ったとしたら，その語りの中に「研究」という言葉は現れるだろうか．残念ながら今回の研究では，学部から直ちに進学した大学院生へのインタビューを行わなかった．したがって，これが社会人大学院生に特徴的なことなのか，それとも現在の大学院生一般に共通することなのか明らかではない．ここで，教員インフォーマントへのインタビューを引いてみる．

引用10　略歴を問われて
私立の理工学部の大学（注：大学院）に移った（注：学部で所属していた大学と大学院で所属した大学が異なることを意味する）んですけれども，えーっと，そこでのきっかけは，その，（中略）データの（中略）入れ物をもう少し簡単につか……，えーっと，構築することができるだろうかというんで，そうです，ええ，あのー，だから，入れ物を作るということですね．コンテンツを集めるのではなくて，入れ物を作る側になったんですけれども，…（後略）．

（AT1）

引用11　略歴を問われて
（前略）…で，もう，しかし，３年生が終わりぐらいになると，ああ，もう，これは教員になるのか，大学院へ行くのか，どっちかにしようと．ということで，まあ，研究しててもおもしろかったので，まあ大学院も受けてみようと．だけど，教員の採用試験も受けてみようということで受けまして，（中略）まあそちらも通って，大学院も通って，どうしようかなというときに，ああ，もうこのまま，人生決めてしまうのもおもしろくないということで，オプションをさらに後に延ばして，で，大学院へ入ったと．

（BT1）

ここでインタビューを実施した教員は二人とも，学部卒業後すぐに大学院に進学している．引用は，彼らが何を思って大学院に進学したかという語りである．彼らの語りの中には，「研究」への期待・興味が表明されている．もちろん，彼らの語りは，10年以上研究者として生きてきて，そして現在も研究者として自らをアイデンティファイしている人間が行った，「過去の現実の再構成」である．その意味で，現在の大学院生と単純に比較することは出来ないのだが．

こうしてみると，院生インフォーマントが思い描く大学院の姿が見て取れる．すなわちそれは，知識を獲得する場としての大学院であり，自己啓発の場としてのそれである．

2．視座２：「学び方」

視座１では，大学院進学の動機を軸として検討した．その結果，知識獲得の場としての大学院，という側面が明らかになった．

では，そこでの「知の実践」はどのようなものなのだろうか．院生インフォーマントが大学院での「知の営み」をどのようなものと捕らえたかを次に検討する．

ここでは，大学院における授業に焦点をあてる．そこから，院生インフォーマントの思い描く「知の実践」を引き出してみたい．

引用12　大学院での研究と勉強に対する期待を尋ねられて
あるものといえば．で，まあ，ある程度，自分がそれぞれに興味持ってたんで，それについての，まあ，専門の先生方から話は聞けて，まあ，こう，自分自身で持ってる，そういう，こう，手が付けられないと言いますか，あのう，ちょっと，こう，つかみどころのなかったようなところが，まあ，わかるようになったかなという感じですね．

(AS1.4)

引用13　「役に立つ授業」という話題の中で
こう，自分が進んで行くやろう中で「あっ，これは役に立ちそうだな」っていう授業はありましたね．

(AS1.5)

引用14　AS1.5の具体的な例を説明する中で
…，問題を考えるときに，どういう価値軸，軸を出すんですよ．（中略）問題を捕らえる時には．その軸の出し方がすばらしかったですね．ああいうようなのは，まあ，一線でやっぱり，こう，されている方の見方ですよね．実践的というか，まあヒントになるということですね．ただ，それだけだと全然意味ないんですよ．
（Q．それは，御自身の，その，社会の中でのことに結び付き易かったっていうことですか？）
そういうことですね．ツールと言いますかね．
（Q．じゃ，その，大学院に来る前と来た後，あるいは，もう，その，マスターにいる間と今っていうのでは，大分仕事にする時でも，変わって来てるっていうようなとこはありますか？）
ああ，だから，まあ，そういう捕らえ方に持っていくと，捕らえ方の選択肢が増えている，というふうに言った方がいいですかね．

(AS1.6)

引用15　「役に立つ授業」という話題の中で
（Q．これはまああんまり役に立たないなというような授業っていうのは，単にこうですよっていうことを言ってただけで，なかなかそれは，実践的な面には結び付きにくいって思われたような授業ってことなんですか？）
まあ，本当，存在論だけの話，これはこうですっていうようなことだけの授業ってのは，確かにありましてね．それは，あの，やっぱりそれはそういうような体系なんですね．はい，で，そこですべて終わりですよね．

(AS1.7)

引用16　「役立ちそうな授業内容は」という話題の中で
（Q．今後，その，えー，今後，起こり得るようなことを前もってっていうの，あれですけど，想定されるのを大学院で，）
そう，学べたかなという気がしますね．ま，何年後になるかわからないけれどというのもあるし，数年後になるかも知れないですけど，というのはありますけどね，着実にそういう動きが，出てるのかなというのは，教えてもらったような気しますけど．

（AS2. 4）

引用17　「おもしろい授業」という話題の中で
…，その，今まで学んだことないんで，逆におもしろかったですけどね．

（AS2. 5）

引用18　大学院の授業に対する希望を尋ねられて
あの，ほかの社会人の方と話する機会，そうですね．異分野，異業種の方なんで，話する機会が，何か授業でセッティングでき……してもらえればと，ありがたいんですがね．

（AS2. 6）

引用19　「進学の動機」という話題の中で
どちらかというと，（中略）ずっと，独学っていうか，自分なりにやってきたんで，自分自身に，ひょっとしたら偏りがあるんではないかとずっと思ってたんです．だから，やっぱり，教えてほしいっていうのが，教えてもらいたいというのがあったんで，自分自身が，自分のやっていることが，果たしてこれは正しいのか，自分がこういう勉強の仕方が正しいのか，よく分かっていなかったので，それをまあ確かめるという意味合いもあったんですけども．

（BS1. 2）

引用20　印象に残った授業について尋ねられて
（前略）まあ研究を進めて行く上で，僕も統計のいろいろこう，ね，データ処理はしましたけども，ほかの学生さん方もみんな，統計の処理するのに，やっぱり，統計の勉強をしたいなというのがあったんですよ．で，それをBT先生が，別枠（注：正規の授業時間外という意味）でちょっと教えてもらったという，そういうことが１回あったんですけども．（中略）それをやっていただいたんは，すごいおもしろかったなと思います．

（BS1. 3）

引用21　「役に立つ授業」という話題の中で
えーっとですね，知識が広がったというか，そうですね，例えば，（中略）やっぱり，大学に来ると，そういう先生方がいろいろあれこれ情報を下さいますんで（注：現場にいると日々の活動に追われて把握しきれない行政的な動きなどをさす），「ああ，そうなのか」ということが結構多かったですね．（中略）そうです．視野が広がりましたね．例えば，（中略）最初に大学に入ったときに，そうじゃないんだよってことばをぱーんて言われたときに，「ああ，これは青天の霹靂ってことだな．ああそうか，こういうふうに考えるのか」というふうに思いましたけど．

（BS1. 4）

引用22　「ゼミの形態」という話題のなかで
…，私が本当に自分の研究にかかわらせていける授業というのは少ないんですね，やはり．（中略）だから，それはちょっと，何か，初めのうちは戸惑いましたね．実際，もうほとんど単位は取り終わ

ってますけども，やってみて良かったとは思ってます．（中略）今になってみれば良かったんですけども，その頃は，何か，すごい遠回りをしているような，何か，どうしてこんな題で，こんなタイトルで，レポート出さなきゃいけないんだろうか．私の専門と全然違うじゃないか，っていうのはありましたね．（中略）私は，外で自分なりに勉強してきたというのがあるので，やっぱり，その辺はちょっとずつずれていっ……，ずれてたかなという気はします．でも，今となっては，やったことは決して無駄になってないと思いますし，すごく，いろいろお話聞かせてもらって，勉強させてもらって良かったなとは思ってますけど．

(BS2. 3)

これらの引用を読むと，彼・彼女らの求める「知」が，きわめて実践的であることが伺える．「ツールとしてヒントになるような知」，「世の中の動向を知る」，「自分の専門に関係する知識」などの言葉で語られているのは，彼・彼女らが，現場で直面した問題や不安を解決してくれる「知」を求めている，ということなのであろう．

さらにいえば，そのような「知」は，与えられるものなのである．授業という経験を通して表明される，「つかみどころのなかったようなところが，わかるようになった」，「…着実にそういう動きが，でてるのかなというのは，教えてもらったような気がしますけど」，「えーっとですね，知識が広がったというか，…」，「…，すごく，いろいろお話聞かせていただいて，勉強させてもらってよかったなとは思ってますけど」といった感想が，このことを示唆している．

つまり「知」は，彼・彼女らの外側にあって，それは例えば授業を通して教員によって提供されるのである．引用20は，このことをよく示している．あるいはまた，同じ大学院で学ぶ「若い子」や「異業種の人」から提供されるのである．

ここに，院生インフォーマント諸氏の共有する知識観が垣間見える．

つまり，「知」はそこに存在しているものなのである．そして，そこに存在する「知」は疑いようのない「知」なのである．「知識が広がる」「…を見せてもらった」といった発言の裏側には，そこに存在する「知」に対する絶対的な肯定がないだろうか．彼らは，そこに存在する「知」を利用して，自らの抱える問題に向き合う．あるいは，将来それが役に立つことを期待して獲得する．

では，彼らが所与のものとして肯定する「知」は，誰が，いつ，どうやって創り出すのだろうか．

視座３ではこの点を検討する．

３．視座３：「知」を創造するということ

視座２では，院生インフォーマントの授業に対する発言を手がかりに，彼・彼女らが共有する知識観をたどってみた．彼・彼女らは，「知識」を外側にある「素材」と見なしているのではないだろうか．それが，本研究の得た結論である．

では，その「素材」は誰が，いつ，どうやって創るのだろうか．院生インフォーマント自身は，この素材づくりに参加していないのだろうか．院生インフォーマントの「研究」に対する考え方

を手がかりに，この点を探ってみる．

引用23　修士論文の研究テーマを決めた時期について
ああ，もう持ってましたね，（注：修士課程に）入る時には．
（Q．お仕事の現場で，そういうような問題意識を持つにいたったみたいなところがあるんですか？）
というか，もう，時代の流れだなということですね．
（Q．…これをやるにはここだというような，そういう目標があって，こちらに来られているということですかね？）
そうですね．はい．
（Q．…修士論文でやろうとしていた研究っていうのは，修士に入る前からもっておられたテーマと見させていただいてよろしいんですか？）
ある程度，まあ修正したところ，ありますけれども，ほぼ，合致している．

(AS1.8)

引用24　修士論文の研究テーマを決めた時期について
（Q．先生につかれる時点で，その研究をやろうということ，もう，最初から決めて入ってこられたんですか？）
まあ最初のきっかけは，まああの，先生等の，この先生という形で入ったわけではないんですよ．要は，その，何ていうんですかね，項目というか，セクション，研究のテーマというのがあって，行政におる身であるんで，（中略）行政に近くて，あと，◆◆関係（注：インフォーマントの専門領域をさす），ということで，（中略）それで，僕はAT先生で．

(AS2.7)

引用25　進学の時点で何をやりたいのかはっきりしていたかと問われて
もちろん，（中略）授業に生かせる何かこう，勉強がしたいなというふうに思っておったんですけども．

(BS1.5)

引用26　修士論文の研究テーマを決めた時期について
（Q．修士論文に選ばれた，実験授業的な内容っていうんですかね，それというのは，進学してこられる前から，何となく持ってたものなんですか．それ，いつぐらいからお持ちになったものなんですか．そういうテーマというのは．）
何となく，前から持ってましたね．
（Q．じゃ，その○○（注：インフォーマントの所属する研究科が対象とする分野）っていう関連のことを，御自身がやってる授業に生かしたいというような．）
そうですね．特に，映像を使った授業をやりたいなと思っていたんですけども，（後略）

(BS1.6)

引用27　修士論文の研究テーマを決めた時期を問われて
春ですね．今年の春ですね．（中略）２月ぐらいから（注：修士課程１年目の終わり頃をさす），そろそろ固め始めて，それまで，ずっとこう，いろいろ，BT先生の御指導のもと，いろんな文献を読んだりとか，本をまとめたりとかして．（中略）論文のテーマは，（注：大学院進学の時点では）まだ決まってなかったですね．

(BS2.4)

引用23－27に見られるように，院生インフォーマントは大学院に進学してきた段階で既に，研究のテーマを決めている．ただし，ここで「決めていた」と彼・彼女らが語るテーマは，研究の方向性あるいは枠組みであって，漠然としたもののようである．

一方彼・彼女らの修士論文は，きわめて実践的な問題を扱っている[5]．それは，社会人大学院生が予めもっている問題意識を具体化した，実践的なテーマである．

ここに至るまでに，どのようなプロセスがあったのか．残念ながら，院生インフォーマント諸氏へのインタビューでは，この点は必ずしも明確にはならなかった．今後の研究では，この点に関してより掘り下げた質問が必要だろう．

他方，教員インフォーマントに対するインタビューでは，このプロセスに関する興味深いコメントが得られた．

引用28

えーっと，働きながら，勉強する厳しさっというのは，その時にわかりましたので（注：この教員自身が，大学院生時代に会社で正社員として勤務していた経験をさす），で，いろいろその，紆余曲折あったんで，何とかその，今，その社会人の大学生（注：大学院生をさす）をかかえる立場になって，そういう連中にできるだけロスなくね，ロスなく，その，彼らの，その，目的とするものを，えーっと，得させてあげるっていうか，その，ゴールに向けて導いてあげるっていうのは，考えてはいるつもりなんです．

(AT2)

引用29

えっと，その人の技量がどのくらいのもんで，で，潜在的な能力がどのくらいで，今，割ける時間がどのくらいでっていうことをきちんと整理しておいて，えーっと，相手に課題を与えるというかな，ノルマを与えるというかな，そういうことをかなり神経使ってやらないと，うまくいかない．お互いの信頼関係が成り立たないんで，黙ってても……，うん．（中略）彼らは，うーん，何ていうかな，それはある程度，方向性を決められて，それにのっとってやってるという．（中略）だから，そういう自分で右往左往する時間というのは，もっと別に，もっと後に，後にね，別に使った方がいいという考え方ですね．だから，あの，院生だから，あの，勝手に勉強せいと絶対言わないですね．

(AT3)

引用30

（前略）…代表的な論文を１つ，２つ，また３つぐらいやな，教えて，そこから芋づる式に勉強させる．つまり．勉強の仕方の入り口を教えてあげる．これは，やっぱりやらなあかんかなと．だから，今までの職業的な大学院生（注：本研究でいうところのfull-time studentをさす）だけを扱ってる大学では，僕，そんなこと，もし，自分がそういう大学院を教えるんであれば，そんなことは絶対にしない．そんなあほなと，自分で見つけるものだと言えるけども，僕は，だから，社会人を扱っている以上，その方法が４年間あれば，通用するけど，２年では通用しないと．時間的に圧倒的に，もう足りない．

(BT2)

そこに見られるのは，手篤い教育的配慮である．

社会人大学院生は，part-time studentである．職業と学業を両立させることが厳しいものであるということはいうまでもない．彼・彼女らは，睡眠時間を削り，休日を削って学業にあてている．それでもなお，絶対的な時間が不足している．その不足を，制度的にサポートするシステムは，現在の日本では整っていない(6)．その代わりとして，個々の教員による教育的配慮が求められることになる．

また，院生インフォーマントが大学院進学を決意した動機の主たるものは，知識の獲得であった．彼・彼女らの要求を満たすという意味でも，ある水準までの「知識の提供」は必要不可欠なのだろう．

同じ教員が，自らの院生時代を語ったコメントと比較するとなおさら興味深い．

引用31

僕らの時は，（中略）何でもいいから勝手にやれというような，放り出しというかなあ，ほんで，だから，あの，会社ではいろんな人の仕事を盗むと同時に，その，大学でも，人がやってることを見て，あの人は，あの，えー，２年先の話を，ああいうことをやってるから，俺は，こういうものを着目して，で，自分でだんどりをこさえて行きますよね．だから，そう，ちが，起きた違いというと，我々の時は何でも自分でやった．

(AT4)

引用32

ただ，僕が大学院生のときっていうのは，どないしたかというと，自分でおもしろいというテーマを見つけてきたら，まず，日本で出てる専門書を読んで，その後ろに付いている参考文献を徹底的に――英語やけどね，今度は――コピーしてきて全部読む．大体その分野のことがわかって，何が調べられてて，何が調べられてないのかわかると．これで，修士論文書けるかな．いや，もうちょっと別の分野を見てみようということで，そういう穴掘りを５つ６つの分野でやったから，物すごい量の本を読みましたね．（中略）指導していただいた先生は，結局，節目節目で御指導いただいてるだけで，院生なんてのは自主的に動くもんだから，自分たちで，先生の話が聞きたいいうたら，まだ30代の若い，けど最新の研究をしている先生はね，大学院担当じゃなくても呼んできて，講演さしたりとかね，自分がわからなければ，そういう分野の先生とこへ飛び込んでいって，ちょっと論文教えてくれとかね．やったら，なんぼでも，学問的なことに関しては，大学の先生は時間を惜しまないからね，やってくれはるから，物すごくたくさんの論文を，自分で読むということをやってたんで，…（後略）．

(BT3)

引用33

でも，まあそういうふうにして，自分が組織立ってね，自分で勉強すること，値打ちある．それから，統計なんて，今の子は教えてくださいて来るけども，そんなん「統計教えてください」なんて言うもんではないでしょう．あんなん自分で勉強するものではないですか．（中略）だから，自分でやって「これでよろしいか」と言って先生に持っていくと．ある一定の水準まで上げて「先生どうですか」と持って行かないと，先生だって相手にしてくれへんかったやん．「あほか，お前，こんなレベルで来るな」言うて．でも，今の人は，そんなことはないからね．最初から手とり足とり教えてほしい．（中略）そこが，決定的に違うんちゃうかな．

(BT4)

院生インフォーマントから，このプロセスに関する詳しいコメントが得られなかったので，これ以上の分析は難しい．ただ，彼・彼女らがテーマを絞り込むプロセスは，教員インフォーマントが院生であった頃とは対照的であるように思われる．

では，院生インフォーマント諸氏は，そのような自らの活動をどのように定義づけているのだろうか？

引用31－42がこの疑問への回答である．このうち引用34－36は，彼らの修士論文作成過程を「研究」とみなしているのか，あるいは「勉強」と見なしているのかを尋ねたものである．さらに引用37－42は，彼らの「研究観」を語ってもらったものである．

引用34　自身の活動を「研究」か「勉強」かと問われて
（Q．大学院でやってることをね，勉強と言う人と，これは研究なんですよ，というふうに言う人と，いろいろいるんですけども，えっと，どちらの言葉よく使われますか？）
どっちも使わないですね．いや，大学院．大学だよっていい方しますけど．

（AS1．9）

引用35　自身の活動を「研究」か「勉強」かと問われて
えっ？　ああ，勉強だと思ってますけど．

（BS1．7）

引用36　自身の活動を「研究」か「勉強」かと問われて
研究ですね．

（BS2．5）

引用37　「役に立つ授業」という話題の中で
つまり，その，さっきもちょっと言いましたけども，自分の手の届かないようなところは，まあ届くようになったという言い方を私，しましたけども，要は，あの一，どう言えばいいのかな．大学にあるものは，あくまで存在の話なんですよ．世の中はこうです，ここには，こういうものがあります．ということが並んでいるだけであって，そこで行動を起こすのは，やっぱり，その人なんですよね．それがある程度，ですですです，ということがわかって，そこから行動を起こすのは自分ですから．そういう意味では，もう，大学にあるのは，それだけであれば，役に立たないんですよ．そこにあるきっかけをうまくこう，結び付けられるかというところですよね．結局，それは，結局，日本の大学の問題でもあると思うんですけどね．あくまで，存在だとか，えー，状態を言ってるだけっていうのが，日本の大学かなと．多分，それは○×さん（注：インタビュアーの名前）も一緒だと思うんですよ．いろいろ勉強されてきて，何かをこう，意義付けて，自分が進もうとするにあたって，その材料を取ってくるわけであって，それ自体には，問題，あのう，何も意味がないはずなんですよ．（中略）そこに，何を意義として，こう，あるんですかという，その辺が，やっぱり，まあ，本物の，どういうのかな，学問とかやってる人は，そういう意味では違うのかなっていう気がしますね．意義，意義ですよね．（中略）ただ，その意義付けまでも含めてやってるっていうところが，ちょっとやっぱり，まだ少ないのかなという気はありますね．

（AS1．10）

引用38　修士論文の内容を尋ねられて
内容は，あの，やはり◇◇行政に携わってますんで，（中略），それぞれの，ユーザーに合った形で，その，情報を発信していくという，モデルの研究ということでさしていただいてるんです．

(AS2. 8)

引用39　修士論文の内容と仕事との関係について問われて
だから，これ，今のとこ，モデルの研究なんで，今後，そういう公的な機関で，まあ，管理運営してもらえれば，ありがたいと思っていますけどね．

(AS2. 9)

引用40　研究とは？と問われて
研究．研究というのは，人がやってないことをする，勉強することでしょう．勉強するというか，自分で考えて作って行くというか．

(AS2. 10)

引用41　研究とは？と問われて
えーっとですね，そうですね，やっぱり，研究となると，どうしても真理を究めるというか，そういう知的な欲求に動かされて，いろいろこう，調べたりとか，実験やったりとかというそういうイメージですけども．うーん，我々が，（注：現場でやっていることは）僕自身は，あまり研究というイメージはないんですね．研究はせんなあかんのやろとは思うんですけども．

(BS1. 8)

引用42　自分自身にとって研究とは？と問われて
…，だから，やっぱり，あんまり研究，研究といってこう突き詰めて，現実離れしてしまったら意味がないと思うんですよ．だから，何らかの形で，こう，現状，現場に，フィードバックできるものでなければ意味がないのかなと．

(BS2. 6)

彼・彼女らの論文執筆は，現場との緊張関係の中で作成されている．現場で抱える問題の答えを探す，現場に結果（成果）を持ち帰る，など，強く現場を指向したものである．自らの活動を研究と位置づけている場合も，勉強と位置づけている場合も，そこに共通するのは，現場意識である．つまり，彼らの活動は，現場に「知」を加えることなのである．そのために，大学にあるものを素材として利用する．

だからこそ彼らは大学院に「教えてもらうこと」を希望する．引用43－46はそのことを示しているのではないだろうか．

引用43　大学院の果たす役割は？と問われて
うーん，大学院……，理系の人やったらねえ，いろんな新しい未知の分野を切り開くとか，そういう形の大学院でしょうけど，○○の大学院（注：インフォーマントが所属する研究科）になると，やはりその，これからの流れとか，そういうのを，実社会との話ですね．交わる点を，何か教えていただきたい，という，…（後略）．

(AS2. 11)

引用44　大学院の果たす役割は？と問われて
大学院に来て，あれこれ，いろんな情報を，いろいろ研究会とか学会なんかの発表会とか見に行きましたけども，そういうとこで話されているのを聞いて，まあ思うようになったんですけども，（中略）やっぱり，大学出て，そこから先，現場へ行って，さらにもうワンランク上の再教育を受けるというような機会は，やっぱり，あるべきやと思うし，それを大学院がやってくれたらなあとは思います．
（BS1. 9）

引用45　理想の大学院とはどうあるべきか？と問われて
…，やっぱり，自主性を持って研究する場所でなければ，意味はないと思いますね．（中略）こう，自分の研究意識……，研究テーマをきちんと自分なりに考えて，だから，もちろん，私も，ここに来て，修論，何で書くか，決めずに入ってはきてますけども，こういうことを勉強したいというのはありますね．だから，それなりに，自分なりに，こうテーマをある程度，このカテゴリーなりテーマを絞って，これを勉強したい，これを研究したいというものを決めて，やっぱりやってこないと，…（後略）
（BS2. 7）

引用46　大学院の果たす役割は？と問われて
やっぱり，そうですね，でも，やっぱり，高度な研究をしたいと思う人たちの要求には応えられるところでなくってはいけないとは思います．一般のちょっとハイレベルの勉強をやり直したいという方を受け入れる分野は，もちろん，あっていいと思うんですけども，それ以外に，もっと高度な研究を受け入れられる，要求が満たされるものでなければいけないとは思いますけど．
（BS2. 8）

本研究では，社会人大学院生へのインタビューを中心に，「動機」「学び」「研究」という視座から，彼・彼女らの求める「知」の世界を探ってきた．

そこで見いだされたのは，彼・彼女らが現場の問題に「解答」を与えるような「知」を求めてやまないということである．そのために，彼・彼女らは大学にある「知」を素材として利用する．その結果彼・彼女らは，現場に新しい「知」を加えてゆく．その活動は貴重な「知」の生成過程であり，素材づくりとなりうるはずである（本研究の院生インフォーマント諸氏も，自らの活動を「研究である」と，もっと自負を持って語って良いと思う）．

ただしその「知」にはある特徴が備わっているように思われる．それは，彼・彼女らの生み出す「知」がある意味では個人的な「知」であり，現在の「知」の延長線上に位置づけられる「知」だということである．ここに，研究者養成を前提とした「知の実践」との相違を見ることは出来ないだろうか．

研究者養成を前提とするとき，大学院生は，自らの力で「問題」を学問の文脈に乗せるよう要求される．先に引用した，教員インフォーマントの大学院生時代についての語りは，彼らが自らの力でそうしてきたことを示している．それは，少し理論が飛躍するが，理論を指向した「知の実践」といえるかも知れない．

大学院を語るとき，その目的を研究者養成と再教育に区分することがある．社会人大学院生の受け入れは，一般的には後者を意図している．そして，前者は研究に重点を，後者は教育に重点

を置くものと考えられている.

しかし，これは奇妙な話である．なぜならば，研究者養成も，再教育と同じく「教育」と見なせるからである．しかるになぜ，研究者養成を目的とした大学院では，研究に重点がおけるのだろうか．それは，前者が表立って教育を語る必要がなかったからである．少なくともこれまでは．なぜならば，研究者養成のための教育は，多分に「徒弟制」に依拠していたからである．そこでは，大学院生が自らの問題を「学問の文脈」に乗せるプロセス自体が，教員の研究活動と同調している．言い換えれば教員は，自らの研究活動を「見せる」事で大学院生の「学び」を期待する．大学院生は，「師」から様々なことを「盗む」事で学んでゆこうとする．だからこそ，教育を語ることなく，教育と研究は両立していた.

一方，再教育型では，この方法は通用しないだろう．そこで大学院生が求めているのは，本研究のインタビューが示すとおり，現場で感じた問題，不安を解決するための「答」である．大学院生の「知の営み」が教員の研究と同調するのは，彼らが結果を出そうとする段階に至ってからかも知れない．それゆえ，様々な「教育的配慮」が必要になる．限られた期間に，限られた時間しか学業に費やせない彼らが，一定の成果を出すには，必然的に「効率」が求められるからである.

ただし，彼らの求める「答」が既に存在するとは限らない．多くの場合それは，存在しない．存在しなければ，見つけるしかないだろう．運良く存在したら，その先に，さらに「答」を必要とする「問」が待っているはずである．その「答」を探す試みは，とりもなおさず「研究」である．そしてその結果は，後に続く人たちにとって素材となるはずである.

だからこそ大学院は，「研究」をする機関であるべきなのだと思う．彼・彼女らの問題（疑問）にどうすれば解答が得られるのか，彼・彼女らの抱える問題（疑問）のその先にさらに問題（疑問）が待ち受けているのだ，ということを教えられるのは，研究という「知の実践」をおいて他にないのではないだろうか.

歴史的に見ると，我が国の大学院は，研究を「遂行する」機関としても，教育の機関としても，十分にその機能を果たして来なかったようである(7)．そうした状況に加えて，新たに「再教育」機関としての役割が，クローズアップされようとしている．こうしたことが相まって，大学院における「教育」が正面から論じられるようになってきたのであろう.

ただこれまで見てきたように，大学院における「教育」は，例えそれが「再教育」を目的としたものであっても，「知」を創造するという研究活動を抜きにしては語り得ない．もしそこで，「知の創造」を省くならば，もはやそれは大学院における教育とはいえないだろう．大学院において充実した教育が行われるためには，とりもなおさずそこで充実した研究が遂行されていなければならない.

いま大学院は，研究を「遂行する」機関として自らを再定義する時期に来ているのかも知れない.

謝辞

1．本研究は，平成12年度関西大学重点領域研究（研究課題「現代の大学・大学院における高度・専門職業人教育のあり方に関する実践的・総合的研究（代表者：関西大学法学部眞鍋俊二教授）」）による助成を受けた．

2．本稿の執筆にあたって，関西大学法学部眞鍋俊二教授に深謝いたします．

3．本研究の遂行にあたっては，木村竜也氏，與久田巌氏の協力を得ました．ここに記して感謝します．

参考文献

Barton, R. Clark (ed.) (1993) *The Research Foundations of Graduate Education: Germany, Britain, France, Unaited States, Japan.* The University of California Press, Berkeley, CA. U.S.A.（潮木守一（監訳）　1999　大学院教育の研究　東信堂　東京）

註

（1）「教育」と「研究」の表記順序に特別の意味はない．その順序にこだわる方もいらっしゃるようだが，本研究では特にこだわりはない．

（2）自らを「研究者」と位置づける大学人にとって，「教員」というカテゴリー化には強い違和感を覚えるらしい．本研究では，大学・大学院において演習を含む「科目」を担当する個人を総称する用語としてこの言葉を用いる．

（3）もちろんその相違には，大学以前の学校教育も強く影響しているだろう．また，大学自身が行う学部教育の影響はさらに直接的であろう．

（4）対立する概念が，full-time studentである．その差は，学業に費やせる時間的自由度にある．社会において職業をもつ人は，仕事の終わる夕方以降か，もしくは仕事が休みの時しか，学業に時間を費やせない．もちろん，大学院の授業や演習も例外ではない．このような状況にある大学院生をpart-time student，それ以外の大学院生をfull-time student，と本研究では呼ぶ．

（5）インタビューでは，きわめて具体的に研究内容について語っていただいた．

（6）例えば，修学年限はfull-time studentと同じである．このことは，修了を延期した場合に，少なくない額の学費を余分に払わなければならない事を意味する．社会人大学院生については，最長４年を限度に３年目以降の学費を免除する制度があっても構わないと思う．

（7）Barton, et.al. (1993)　第９章，第10章を参照．

Appendix A 教員インフォーマントへの質問骨子

A. 経歴

1．略歴

2．大学に残ろうと決めたのはいつ頃か？

3．大学に残って、何をしたいと思っていたか？

B. 院生に対する評価

1．（インタビューを行った院生に対して…）院生としての姿勢をどう評価するか？

2．（院生一般に対して…）最近の院生をどう思うか？

C. 大学院では、どのような科目を担当しているか？

1．授業／演習を通じて、院生に伝えたいことは何か？

D. 理想とする大学院教育のあり方とは？

1．それに対して、現状はどうだと思うか？

a. 自分自身が院生であったときと比較するとどのような違いがあると思うか？

2． 自身の研究と院生の指導（教育・研究）との関係をどのように調整しているか（あるいはしていないか？）

a. 院生の研究を自身の研究にどのように位置づけているか？

E. 大学院の意味

1．大学院とは何をするところだと思うか？

a. 現状をどう評価するか？

2．大学で仕事する者の一人として…

a. 社会の中で大学院はどのような役割を果たすべきだと思うか？

Appendix B 院生インフォーマントへの質問骨子

A. 自身のこと

1．経歴

a. 大学院進学まで

b. 大学院（修士課程）修了後の予定

B. 現在の研究・学習活動のこと

1．修士論文について

a. 具体的な内容

b. 大学院進学前には、修士論文でどんな研究をやろうと考えていたか？

c. 進学前に思い描いていた内容と一致するか？

(1) 一致しないとしたら、それは何故か？

2．大学院の授業について

a. どの授業が、おもしろかったか／役に立つと思ったか

(1) その理由

b. 大学院終了後社会に出たとき、授業で教わった内容は役に立つと思うか？

(1) Yes → 具体的な科目名・内容

(2) No → 理由

C. 本人にとっての大学院の位置づけ

1. 修了後、２年間の研究・勉強は、仕事にどのように役立つと思うか？

2. ２年間の研究・勉強を、今後、仕事にどのように役立てようと思うか？

D. 大学院という機関へのイメージ

1. 大学院に進学した理由

a. どのような研究・勉強をしたいと思っていたか？

(1) 大学院でやっていることは、「研究」「勉強」のどちらか？

(2) 学部との違いをどのように考えているか？

(3) 「研究」という活動は、どのような営みだと思うか？

b. 現実は、どうであったか？

(1) 満足しているか？

(a) どのような点に満足したか？

(1) ギャップはあったか？

(a) （もし何か問題があるとしたら）何が問題か？／どうすれば改善できると思うか？

2. 大学院への進学は、あなたにとってどのような意味を持つか？

a. identityとの絡み

3. 大学院という機関の社会的意味について

a. 院生として、社会の中で大学院はどのような役割を果たして欲しいと思うか？

(1) 現状は、どうだと思うか？

b. 先生に対する要望はあるか？